

時代を生き抜く人生

私は昭和 12 年に生まれ、戦後の混乱と復興の中で成長しました。小学校時代には下駄を履いて通学し、教室では暖房にだるまストーブを使用しました。弁当を温めるための工夫や、給食の味が今も鮮明に思い出されます。

高校ではクラスメートが 50 名おり、大学進学を目指す者はわずかでした。卒業後は国鉄に就職し、厳しい試験を乗り越えて昇進を果たしました。しかし、家庭にはなかなか時間を割けない日々が続きました。

昭和 30 年代から 40 年代には、労働組合運動が盛んで、国鉄でもストライキが発生し、10 日間列車が運転中止となることもありました。その度に給料のベースアップが行われましたが、一方で国鉄債務は 10 兆円にも達しました。昭和 50 年代には組合が分裂し、生産性向上運動が進みました。そして中曽根内閣の行政改革の一環として、1987 年 4 月 1 日に国鉄は民営化され、JR が発足しました。

その際、「残るも地獄、去るも地獄」と叫ばれた中、私は JR に残ることを決意し、技術職から営業職に転職し、JR での業務に 5 年間取り組みました。JR 時代には、業務指示が労働組合の現場協議に依存せず、より効率的に作業を遂行することが可能になりました。

定年までの 5 年間、馴れない経理の仕事に携わり、民間への出向も経験しましたが、悔いのない現役生活を過ごすことができました。JR 時代には、ゴルフを覚え、飲み会の後にはカラオケが定番となりました。家庭でもカラオケ設備を設置し、物質的にも豊かな生活を享受しました。

昨年 87 歳の誕生日を迎えました。定年退職の 60 歳から 27 年を振り返ってみたい。定年後には自由になる時間がある事から、地域や鉄道 OB 会、菩提寺の役員を 10 年余り仰せつかり、勤めを果たしてきました。分館長時には桔梗ヶ原の地が、明治 2 年に鋤入れされ、歴史の浅い地域である事から、歴史講演会の開催、分館報の特別号の発行や、各種行事や公民館主催で盛大な敬老会を開催し、会場が参加者で満室になった事を覚えており、その後には区長を仰せつかり、住民からの要望事項の解決や、地域で皆が助け合いが出来る体制づくりや、区民が安心して生活が出来る地域づくりに取り組んで来た事が、懐かしい思い出として残っています。

定年後 5 年間シルバー人材センターで、60 歳を過ぎた高齢会員の就業のお世話をして来ました。この 5 年間の思い出が沢山あります。会員就業先を下見確認する為に、塩尻市内の地理が詳しくなった事であり、大企業の EPSON にも自由に入りが出来た事でした。この企業には多くの会員が就業し、月売り上げが上位でありました。人材センターでは職員や会員の慰労や研修があり、思い出の残る職場であり、事務処理はワープロから PC に変革する時代を迎え、職員 1 台の PC が付与され、文書作成から計算処理が出来るようになり、業務能率が向上しました。この頃インターネット時代が到来し、HP (ホームページ) 開設に独学で取り組み、全国シルバーコンクールで 5 位迄に入賞する事が出来たが、この HP 作成が私の人生に生きがいを与えてくれました。

シルバー退職後は会員として 10 年間就業してきましたが、就業時間はすっかり

少なくなり、稼ぎも少なくなりましたが、家庭の生活費は年金で、小遣いはシルバーセンターでの就業手当でありました。ビデオ機器もデジタルカメラやビデオ機材を取り揃えて、塩尻市内の美しい自然や文化財の史跡を映像で残してきました。ビデオカメラでは県内を問わず、美しい花々を撮影してきて、HP を開設していたので、映像の編集したものは180本余りとなりましたが、YouTube に投稿し「塩尻の史跡と自然」のタイトルで映像を公開してきました。今日、43 項目の頁になりました。静止画は種別事にまとめてスライドショーに編集し、ネット公開してきました。

2015年10月からは週一の日誌を書き、今日、病気以外では休む事も無く継続しています。2020年からは鉄道 OB 新聞に川柳を投稿し掲載されたのを機に、毎日新聞の山梨・長野県版の川柳には毎週3首投稿し、今日150数首が掲載されました。私のHPのタイトルは「ふるさとの花と風景」であり6つの項目がリンクされており、google のアナリティクスの訪問者数を調べると、平日は10数人の閲覧者が訪れています。八十路後半の爺がここまでHPにのめり込む老人はいないだろうが、週一のHP更新が楽しみです。

世界的指揮者の小沢征爾さんが88歳で亡くなったという訃報を聞いたとき、私の死生観は大きく変わりました。死生観を持つことで、死を迎える準備ができ、残された人生を全うしようという意識が芽生えました。これは後悔のない人生を過ごすために非常に重要なプロセスです。死生観を持ち、死を迎える準備を整えば、「ああしておけばよかった」という後悔もなくなり、穏やかでより良い人生の終わりを迎えることができるでしょう。

私は自分の死生観を持ち、死を迎える準備ができています。人生に感謝しながら、前向きに生きることを決めました。残された人生をどのように送るかについて、いくつかのポイントを考え、実行しています。

まず、自分の好きなことを楽しむことです。心を癒し元気づけてくれる音楽を聴くことが好きです。ジャンルにこだわらず、幅広い音楽を楽しんでいます。読書や映画鑑賞も私の大きな喜びの一つです。好きなことを続けることで、人生の喜びを感じることができます。

また、家族や友人との関係を大切にしています。伝えたいことはしっかりと伝え、共に過ごす時間が大切です。家族や友人との絆を深めることが、私の人生の支えとなっています。

さらに、新しいことに挑戦することも続けています。日々の出来事や考えたことを日誌に書き、ネットで発信しています。毎週一回、自分の人生を振り返ることで、教訓を得ることができ、人生の成長を感じることができます。

私は残された人生を健康で楽しみたいと願っています。自分の人生を終える準備が整っており、死を恐れずに受け入れることができます。死にゆくときには、笑顔で迎えたいと考えています。

定年退職してからもう26年が経過しました。その間にカメラ技術は大きく進化し、フィルムからデジタルへと変わりました。海外旅行に行く際、フィルムの本数を気にする必要がなくなり、自由に写真が撮れるようになりました。

私は美しい花々や自然の風景に魅せられ、写真撮影を趣味としてきました。デジタル化により、PCでの編集や加工が容易となり、スライドショーにBGMを加えて

HP に美しい写真を公開することを始めました。また、9 年 8 ヶ月前から日々の出来事や感じたことを週ごとにまとめ、朗読と題材に川柳を三句作成して、ネットで公開する活動を続けています。

入院時以外、休むことなく続けてきたこの活動には、我ながら感心しています。日々の出来事を詳しく記録し、心に強く感じたことを掘り下げて書き留めることで、認知症予防にもなり、生きがいを見つけています。現在では、これらの記録を 10 分以上の朗読として仕上げる事ができています。

川柳の魅力は、季節や自然、感じたことを自由に表現できることです。これまでに 250 句余りを作成し、ネットで発信してきました。つい最近、中央新聞と OB 新聞に初めて川柳を投稿し、掲載される喜びを感じました。

今後は毎週 3 句作成し、新聞に投稿してみることにしました。我流の川柳作成は指導者に添削してもらいものではありませんが、妻に見てもらいながら続けています。最初に掲載された川柳は「長生きは健康でいて 趣味を持ち」と「夜が明けて 夜中の一句が 消えている」です。これからも毎週川柳をネットに挿入し、朗読も行っていきたいと思えます。